新見公立大学紀要　第39巻
pp. 163－169, 2018

研究ノート

小児看護学実習の困難とその対策に関する文献検討

山本　裕子[1)]*・上山　和子[1)]

1）新見公立大学健康科学部

（2018年11月21日受理）

少子化や核家族化、小児医療の集約化の傾向が強まり、小児看護学実習においては実習施設の確保困難や受け持ち患児が少ないなど様々な問題を抱えている。そこで、本研究では小児看護学実習における困難とその対策についての文献を検索し、今後の実習指導について検討した。「小児看護」「実習」「困難」をキーワードとして、医学中央雑誌、CiNii Articleを用いて、2013年～2018年の文献を検索した。最終的に44文献が抽出された。小児看護学実習における困難では【現在の小児医療事情が実習へ与える影響】【小児看護学実習での実施内容の限界】【学生、教員・指導者が直面する課題】が抽出され、その対策では、対象者との関係構築への支援、学生の能力に合わせた関わり、教員と実習指導者の連携の必要性が抽出された。小児看護学実習での支援では、対象者との関係構築ができるようコミュニケーション能力向上の必要性、大学側と実習施設側の双方から意見を出し合い実習内容を考えていく必要性が示唆された。

（キーワード）小児看護学実習、困難、対策

Ⅰ．はじめに

近年、小児医療においては小児患者が入院できる医療施設が集約化されていく傾向が強まっており[1)]、看護系大学が増加・拡大している中、小児看護学実習を行う実習施設を確保していくことが大きな課題となっている。また、少子化や核家族化、医療の発展により入院する子どもの減少、入院している子どもがいたとしても入院日数の短縮化、また小児看護学では，1996年のカリキュラム改正において実時間の大幅な短縮があり、実習期間中に受け持ち患児を必ず受け持てるという状況ではなくなってきている。

臨地実習は必修科目であり、実習期間の短縮や社会状況の変化によって実習の実施が困難な状況にあったとしても限られた時間の中で実習目標を達成できるよう実習形態・実習内容を考えていく必要がある。先行研究では重症心身障害児病棟[25) 43) 46)]、障害児施設[27)]、外来[9)]・発達外来[37)]での実習内容が報告されており、病棟実習と外来実習の実習内容を比較した調査結果においては、実習形態によって体験する内容は異なっても実習目的を達成している[2)]ことが明らかにされている。

小児看護学実習では今後も社会状況の変化の影響を受ける可能性が非常に高く、現在の小児看護学実習における困難、そしてそれらに対する対策について指導者である教員や実習指導者が把握し、学ぶ環境の確保・学修の保障をしていくことが必要である。

Ⅱ．目的

本文献レビューによって、小児看護学実習における困難とその対策について明らかにし、今後の実習指導の方向性についての示唆を得ることを目的とする。

Ⅲ．研究方法

1. 文献検索過程

文献の検索は、医中誌Web、CiNii Articleによるデータベースを用い、「小児看護」、「実習」、「困難」のキーワードで、原著論文、2013年～2018年の過去5年間に指定し検索した。医中誌webにて「小児看護」+「実習」+原著論文で検索した結果、165文献が抽出された。次に「小児看護」+「実習」+「困難」+原著論文で検索すると18文献であったが、これらは全て「小児看護」+「実習」+原著論文の検索キーワードで抽出された文献の中に含まれていた。次に、CiNii Articleにて同様に「小児看護」+「実習」、2013年～2018年の過去5年間で検索を行った結果、117文献が抽出された。キーワードに「困難」を加えると該当文献は見当たらなかった。抽出された文献から重複、小児看護学実習に関する内容でないもの、小児看護学実習における困難についての記述がないものを除外し、44文献を分析対象とした。

*連絡先：山本裕子　新見公立大学健康科学部看護学科　718-8585　新見市西方1263-2

表１　【現在の小児医療事情が実習へ与える影響】について

	困難	対策
多施設で実習を行うことによる困難	**＜障害児施設実習での困難＞** ・重症児病棟実習生の不安は一般病棟に比べ有意に高値 ・実習中に家族に会えた学生は、小児病棟100%、重症児病棟43.5%。 ・小児病棟と障害児施設の学びで、「子どもの安全」「情報共有」「小児看護の展開の速さ」は小児病棟でのみ ・重症心身障害児（者）施設入所者の理解 ・訪問看護を受ける子どもと家族への理解 ・患児の身体的特徴や健康問題へ視点を向けることの難しさ **＜外来実習での困難＞** ・継続看護に対する意識 ・症状を中心とした関連付け ・明確になった知識不足 ・技術面での課題 ・家族の不安と混乱の受け止め **＜看護技術経験状況の差＞** ・小児専門病院、一般病院小児科、大学病院小児科での実習で看護技術経験状況に差がある ・病院実習は患児との遊びを、施設実習は日常生活行動援助を多く経験	**＜障害児施設実習における対策＞** ・対象が重症児であるため実習スタート時に強い不安を抱えていることを先ず理解する ・病棟独自の学びを重視した指導と異なる学びを共有する場の提供を検討する ・実習施設の検討だけでなく、何を学ばせるのかという実習内容や方法を検討する ・学生自らがアセスメントし、ケアを実践するケアの主体者となるよう指導する ・学生のイメージを確認しながら、具体的な（小児の）生活場面を想起できるような教育方法を検討する **＜外来実習における対策＞** ・外来実習は、病棟実習の代わりではなく、学生のアセスメント力とコミュニケーション力を向上させる重要な実習施設の場であると位置づけをし、実習に組む ・学生の視点を定め学びを深められるようオリエンテーションなどで、外来で学べそうな継続看護の内容の枠組みを説明す **＜看護技術経験状況の差への対策＞** ・経験率を重視するのではなく、学生が臨地実習で体験できること、学べることを重視する ・実習中にできるだけ体験ができるよう技術到達度表を用いて実施の機会が多い項目について確認をするなどの意識づけ ・実習の事前あるいは事後に看護技術を振り返る
ペア実習における困難	・ペアとの関係性（気遣い、不満と不安） ・ペア学生との比較 ・個別評価の曖昧性 ・実習経験減少の懸念 ・情報共有に伴う困難（時間の確保） ・方針のすり合わせによる疲労 ・実習記録への戸惑い（ペアから得た情報の扱い方・視点の違い） ・患児へ与える負担と圧迫感の懸念	・学生の視点の長所を引き出し学生自身の認識を促すことで、自己効力感を高める工夫をする ・ペアで受け持ったとしても、責任をもった行動がとれるように意識させる ・学生個々の考えを引き出しペア同士の納得を促す ・場面ごとにどちらの学生が主導権を行うのか前もって決定を促す ・様々な状況を想定した対応案の検討を促す
短期間実習における困難	・児の情報収集が満足に行えない ・病状を把握し看護ケアを展開するには「やった感」や成功体験のチャンスが少なく、学生は不全感で終わる ・実習期間中に受け持ち患児がもてない学生がいる ・入院患児が少なく2人で1人の患児を受け持つことにより、体温測定」「脈拍・呼吸測定」の実施が少ない 1週目の「関連図まで書き計画を立てる」がとても大変 ・プレパレーションの実施が困難	・学生の個々の能力に合わせた情報提供を教員側から行い、補完する ・学生の気づきを大切にし、潜在的な能力に働きかける努力をし、成功体験を増やす支援をする

Ⅳ．結果

１．小児看護学実習の困難とその対策についての文献の概要

研究対象は、学生や学生のレポート内容を対象としたものが一番多く36件であり、次いで教員、看護師（CNS含む）を対象としたものがそれぞれ3件ずつ、家族（母親 or 子ども）を対象としたものが2件であった。

研究方法は、面接調査や自由記述内容、レポート内容から得られたデータを質的に分析した質的研究が24件、看護技術経験度などを単純集計し分析した量的研究が13件、量的研究と質的研究の両方を含む研究が6件、事例研究が1件であった。

２．小児看護学実習における困難について

対象とした44文献の小児看護学実習における困難についての記述を抽出し、それらの内容を類似性のあるもので分類しまとめた。その結果、【現在の小児医療事情が実習へ与える影響】【小児看護学実習での実習内容の限界】【学生、教員・実習指導者が直面する課題】に分類することができた。

以下、カテゴリー【】、サブカテゴリー《》、抽出された内容の抜粋「」を示す。なお、抽出された内容は意味内容を確認し、一部まとめて表記している。

１）【現在の小児医療事情が実習へ与える影響】とその対策（表１）

【現在の小児医療事情が実習へ与える影響】では、《多施設で実習を行うことによる困難》《ペア実習における困難》《短期間実習における困難》が挙がった。《多施設で実習を行うことによる困難》には、障害児施設実習では「重症児病棟実習生の不安は一般病棟に比べ有意に高値」、外来実習では「継続看護に対する意識」、看護技術経験状況の差では「小児専門病院、一般病院小児科、大学病院小児科での実習で看護技術経験状況に差がある」、《ペア実習における困難》には、「ペアとの関係性」、《短期間実習における困難》には、「児の情報収集が満足に行えなかった」などの困難が抽出された。

《多施設で実習を行うことによる困難》への対策では、障害児施設実習では、「実習スタート時に強い不安を抱えにいることを先ず理解する」、外来実習では「学生のアセスメント力とコミュニケーション力を向上させる重要な実習施設の場であると位置づける」、看護技術経験の差に対しては「経験率を重視するのではなく、学生が臨地実習で体験できること、学べることを重視する」が挙がった。《ペア実習における困難》への対策では、「学生の視点の長所を引き出し学生自身の認識を促すことで、自己効力感を高める工夫をする」、《短期間実習における困難》への対策では、「学生の個々の能力に合わせた情報提供を教員側から行い、補完する」が抽出された。

表２　【小児看護学実習での実習内容の限界】について

	困難	対策
実習中の技術経験における困難	・バイタルサイン測定実施の困難 ・「呼吸・循環を整える技術」「経管栄養」「膀胱留置カテーテル」に関する経験率・到達率が低い ・看護師のスピードについていけず、後から教員と確認 ・内服を嫌がる患児への「服薬の援助」の難しさ ・受け持つ患児は状態が安定していることが多く、日常生活援助やカテーテル類を挿入している小児の援助について経験する機会が少ない ・口鼻腔内吸引、哺乳瓶による授乳、乳児の沐浴、点滴のシーネの交換、乳児の体重測定、学習の援助、点滴挿入の介助、乳幼児の診察の介助、乳児の身長測定は到達目標に達していない学生が半数以上 ・複数の患児を受け持った群の方が到達目標に達した看護技術の項目数が有意に多い ・清潔援助に関する項目で「機会なし」の割合が上昇 ・看護補助者や業者への委託により「環境整備技術」の経験は年々減少している。	・ 看護師のシャドーイングによって、学生が経験する機会が ・ 少ない細目について学べる機会を作れるよう実習指導者と具合的な指導方法を指導者に要望する ・ 実習場所で経験できる技術を分析し、実習場所による調整や実習指導を検討する ・ 学生に実施させたい項目の優先順位を検討し、その検討をもとに受け持ち患児選定を行う ・ タイミング良く意識的に生活援助の場に参加するよう学生へ働きかける ・ 学生の意義づけとして点滴チェックリストを使用する ・ 看護技術の経験率や到達率を高めるために児や家族との関係構築を支援する ・ 思考や行動を振り返り、知識と統合し、学内で演習できるように学習環境を調整し、実践能力向上に繋げる ・ 限られた体験を、学生同士で協力して看護援助を行ったり、カンファレンスで話し合ったりすることにより、グループ全体の学びとできるような支援をする
プレパレーションの実施に関する困難	**<学生側の要因>** ・患児にとってプレパレーションが必要と学生が判断し、実施に至らない ・実施ばかりに目がいく ・道具を使った説明といった理解にとどまる ・ツール作成に集中する ・子どものイメージができない ・学生自身でプレパレーションを創造することが難しい **＜指導・実施環境の要因＞** ・教員の実践経験が少ない ・臨床での実践が少ない ・学生に合った指導が難しい ・教員・スタッフの負担が大きい ・評価方法が不明確 ・実習期間が短い（考える余裕がない、準備する時間がない） **＜患者・家族側の要因＞** ・子どもの発達段階・状態による実施の制限 ・家族からの許可が得られない ・実際、子どもではなく親に説明を行う	・ プレパレーションに対する臨床の理解や協力を進めていく ・ 子どものアセスメントや子どもの反応を丁寧に振り返り、学生がプレパレーションの必要性を実感できるようにする ・ 患児の状態をあらかじめ予測し対応できるように、実習前から準備する ・ 実習施設の入院患児の状況を把握して、実習で実施する機会が多い事例を取り入れた演習を行う ・ 看護過程を展開する中でプレパレーションが必要と判断して看護計画で立案できているか確認する
受け持ちの承諾が子ども・家族に与える影響	**<子どもへの影響>** ・学生がいることで、児に緊張を与えてしまう ・同意した理由がわからない ・断れない雰囲気 ・望むケアが受けられなくて残念な気持ちになる ・話がかみ合わなくてがっかりする **<家族への影響>** ・学生がそばにいることで、自分の生活ペースが保てず、負担がかかる ・母親の心理的余裕がないことから、迷いながらもしぶしぶ受け持ちを承諾 ・学生の学習環境を整えたり、学習への配慮をするなど教育的役割意識を持たせてしまうこと ・実習に対する学生の消極的な態度についての苛立ち ・学生が学習できているのだろうかと学習への懸念を家族にさせてしまうこと ・学生の気遣いが求めている気遣いではないことへの戸惑い ・実習が終わると子どもと2人きりの入院生活になると思い、孤独を感じる	・ 学生が子どもの気持ちに寄り添えるよう、子どもの発達段階や過去の経験、現在の心境などの理解を促す ・ 双方（学生と母親）の関係性が好転するように、臨床指導者や教員が介入していく

２）【小児看護学実習での実施内容の限界】とその対策（表２）

【小児看護学実習での実施内容の限界】では、《実習中の技術経験における困難》《プレパレーションの実施に関する困難》《受け持ち承諾が子ども・家族に与える影響》が挙がった。《実習中の技術経験における困難》には、『「バイタルサイン測定実施の困難」「呼吸・循環を整える技術」「経管栄養」「膀胱留置カテーテル」に関する経験率・到達率が低い』、《プレパレーションの実施に関する困難》には、学生側の要因として「患児にとってプレパレーションが必要と学生が判断し、実施に至らない」、指導・実施環境の要因として「教員の実践経験が少ない」「臨床での実践が少ない」、患者・家族側の要因として「子どもの発達段階・状態による実施の制限」「家族からの許可が得られない」、《受け持ち承諾が子ども・家族に与える影響》では、子どもに与える影響として「学生がいることで、児に緊張を与えてしまう」、家族へ与える影響として「学生がそばにいることで、自分の生活ペースが保てず、負担がかかる」などの困難が抽出された。

《実習中の技術経験における困難》への対策では、「看護師のシャドーイングによって、学生が経験する機会が少ない細目について学べる機会を作るなど、実習指導者と具体的な指導方法を指導者に要望する」、《プレパレーションの実施に関する困難》への対策では、「子どものアセスメントや子どもの反応を丁寧に振り返り、学生がプレパレーションの必要性を実感できるようにする」、《受け持ち承諾が子ども・家族に与える影響》への対策では、「学生が子どもの気持ちに寄り添えるよう、子どもの発達段階や過去の経験、現在の心境などの理解を促す」が抽出された。

３）【学生、教員・実習指導者が直面する課題】とその対策（表３）

【学生、教員・指導者が直面する課題】では、《子ども・家族との関わりにおける困難》《教員・指導者が直面する困難》が挙がった。《子ども・家族との関わりにおける困難》には、子どもを捉えることの難しさとして「出会ったことのない患児の状態を想像することが難しい」、子どもと関わることの難しさとして「機嫌により拒否される」「児の言っていることや伝えたいことがわからない」、子どもの特徴を捉えた看護援助の難しさとして「小児の発達段階・疾患・予測外の状況で援助技術を変化させ応用させて遂行することの困難」、疾患による影響がある患児との関わりの難しさとして「四肢の屈曲、コミュニケーションが取れない、表情の変化のない児の状態をみて驚き、不安と自信のなさを痛感」、家族との関わりの難しさとして「母親（家族）の存在に訪室のしにくさと重圧を感じながら患児への援助」、《教員・指導者が直面する困難》には、教員-指導者間での連携不足として「実習要綱の閲覧の可否や教員から実習の説明の有無については、指導者経験無し群が10％程度しか受けていない」、業務と実習指導の両方の役割遂行の難しさとして、「指導者の学生指導に対する困難感、いつもどおりにできない負担感」、学生の特徴を捉えた指導の難しさとして学生の「コミュニケーション・関係作り能力の不足」が抽出された。

《子ども・家族との関わりにおける困難》への対策では、子どもを捉えることができるよう『学生の学びを広げるため「投げかける」「話してその意味を伝える」支援をする』、子どもと関われるよう「家族や臨床指導者あるいは教員の子どもへの関わり方、子どもとの反応、また、子どもの好きなおもちゃや好きな遊びなどについて、意識的に情報収集して学生自身の子どもとのコミュニケーションに活かしていけるよう助言する」、子どもの特徴を捉えた看護援助では「患児の気持ちや立場を理解して不安を軽減することができるよう、成長発達を考慮して早期に信頼関係が築けるよう支援する」、疾患による影響がある患児との関わりでは、患児や母親との関係構築ができるように支援していくことに加え、「受け持ちを決定する際、患児の難易度の情報提供をするとともに学生の能力と実践能力を見て、受け持ち決定していく」が抽出された。《教員・指導者が直面する困難》への対応では、「教員は看護師との実習指導に対する意見交換の機会を意図的に作り、学生指導に関する研修や勉強会を設けるように努める」などが抽出された。

Ⅴ．考察

１．小児看護学実習における困難とその対策に関する文献内容の動向

44文献の中には、小児看護学実習の実施場所として重症心身障害児施設や障害児施設、外来を活用した報告や、実習内容としてプレパレーションの実施、技術経験を確保するためのチェックリストの活用など小児看護学実習を実施するにあたり効果的な実習方法の検討がなされていた。多施設で実習を行う可能性の高い小児看護学実習で学生の学修を保障するためには、これらの様々な実習施設での実習内容・その工夫についての報告は貴重な資料になると考える。現在は、学生を対象としている研究報告が多いが、今後は指導・支援する側である教員や実習指導者を対象とした研究も増やし指導する側からの意見を明らかにし実習施設や実習内容についての検討をさらに進めていく必要があると考える。学生からの意見、指導する教員・実習指導者からの双方の意見を考慮することにより、短期間実習であっても学生の学ぶ環境を確実に確保していけるのではないかと考える。

２．小児看護学実習における困難について

小児看護学実習では、成長発達段階にある子どもを対象とするため、子どもへの看護の提供には援助方法の選択や工夫を考える必要があり、学生は戸惑いを感じていた。また、子どもが入院する際には家族が付き添いとなることが多く、学生は家族との関係構築にも困難を感じていた。上述したような困難を抱えながら、学生はさらに現在の小児医療の事情である多施設で実習を行うことによる困難、ペア実習における困難、短期間実習における困難までも抱え実習を行っていかなければならない状況が見えてきた。しかし、単に経験率や到達率を高めるだけでなく、思考や行動を振り返り知識と統合すること、学内で演習ができるよう学習環境を調整することでも、実践能力向上に繋がる[16]と言われているように、学生が臨床での経験を学内での学修と関連づけ、意味づけができるよう教員や実習指導者が協力して実習環境を調整していくことが重要であると考える。

文部科学省は「臨地実習指導体制と新卒者の支援」の中で、臨地実習指導体制には、大学・施設双方の課題があると指摘している。その一つとして、教員・実習指導者が直面する課題として教員から実習指導者への実習内容の説明の不十分さや、実習施設においては日常業務をこなしながら学生の実習指導にあたらなければならないという実習指導者の多忙についての記述が挙がった。その他では、プレパレーションにおいて教員の実践経験が少ない、教員・実習指導者への負担が大きいなど人材に関する課題の記述が挙がった。今後、文部科学省が掲げる卒業時到達度である「ヒューマンケアの基本に関する実践能力」「看護の計画的な展開能力」「特定の健康問題を持つ人への実践能力」「ケア環境とチーム体制整備能力」「実践の中で研鑽する基本能力」を育成していくためには、現在の社会状況に応じた多施設での実習方法の工夫やカンファレンスの活用・工夫、子どもや家族と関わることを苦手とする

表３　【学生、教員・実習指導者が直面する課題】について

	困難	対策
子ども・家族との関わりにおける困難	**＜子どもを捉えることの難しさ＞** ・ 出会ったことのない患児の状態を想像することが難しい ・ 学生の意識にのぼった事実が情報の全てだと捉える傾向がある 病院にいる病気を持った子どもが普通というところからスタートせざ ・ るを得ない状況 ・ 学生はある程度自分のテーマを決めているため、自分が挙げた実習目標以外は見えなくなる **＜子どもと関わることの難しさ＞** ・ 機嫌により拒否される ・ 児の言っていることや伝えたいことがわからない ・ 積極的に関われない ・ 理解できないと諦めて、流してしまう ・ 食事の好き嫌いの多い児に対して、食べれるようにどう促すか困った ・ 子どものふざけすぎにけじめをつけられない **＜子どもの特徴を捉えた看護援助の難しさ＞** ・ 小児の発達段階・疾患・予測外の状況で援助技術を変化させ応用させて遂行することの困難 ・ 子どもへの援助のための積極性の不十分さ ・ 自分（学生）だけで判断していた（患児への確認なし） ・ 患児の状態把握を一場面での判断になり、援助が合っていない ・ 入院後の治療経過が早く、刻々と変化する患児の体調変化の理解に追いつかない ・ 転落事故予防として「ベッド柵をあげる」こと以外では認識が低い。 ・ 患児の理解が得られるような説明ができない **＜疾患による影響がある患児との関わりの難しさ＞** ・ 四肢の屈曲、コミュニケーションが取れない、表情の変化のない児の状態をみて驚き、不安と自信のなさを痛感 ・ 児が重症児であり、快・不快の表情が読みづらく大変 ・ てんかん発作をみたときは、びっくりして、どうしたらいいのかと困る ・ 小児がん患児との会話の内容への悩み、距離のとり方などコミュニケーションについて不安や緊張感がある **＜家族との関わりの難しさ＞** ・ 母親（家族）の存在に訪室のしにくさと重圧を感じながら患児への援助 ・ 患児や母親との距離感に困惑する ・ 親の協力を得られない ・ 患児のことだけ援助してしまい母親の役に立つことができない ・ 家族の思いを引き出すコミュニケーションの達成感が低い ・ 家族の思いの理解の不十分さ	**＜子どもを捉えることの難しさ＞** 学生の学びを広げるため「投げかける」「話してその意味を伝える」支援をする ・ 学生それぞれの体験を意図的につなげ、積み重ねていくために「フィードバックする」「共有させる」場を作る ・ 学生が専門知識を確実に描けるよう資料を活用して共に確認し、教員と同じように理解できるよう支援する ・ 身体的、心理社会的、認知などの各要素、各段階で子どもと家族がどのような状況にあるかだけではなく、それらを統合した理解と共に、子どもの過去と現在と未来を繋げる想像力を持たせる **＜子どもと関わることの難しさ＞** ・ 家族や臨床指導者あるいは教員の子どもへの関わり方、子どもとの反応、また、子どもの好きなおもちゃや好きな遊びなどについて、意識的に情報収集して学生自身の子どもとのコミュニケーションに活かしていけるよう助言する ・ ストレスに対し他者からのサポートを探そうとする学生には、他者と関わる機会を積極的に設定し、学生自身が積極的に行動できる場面を提供していく ・ 上手にストレスに対応できない学生には、学生自身が自己洞察でき、自分自身の今後の改善点を見出すことに焦点をおいた教育的介入を行う **＜子どもの特徴を捉えた看護援助の難しさ＞** ・ 患児の気持ちや立場を理解して不安を軽減することができるよう、成長発達を考慮して早期に信頼関係が築けるよう支援する ・ 学内で学習した知識を実際の援助に結び付けられるようにする ・ 看護師の援助を見学できなかった場合、初めての場所で援助を実施するのは不安という学生の思いを理解して、援助前に場所を確認するなどのシミュレーションを行って、学生の不安を取り除く ・ 子どもの成長発達や疾患を理解できるよう支援する **＜疾患による影響がある患児との関わりにおける困難＞** ・ 患児の難易度の情報提供をするとともに学生の能力と実践能力を見て、受け持ち決定していく ・ 教員は学生が患児との脅威や技術の未遂行への落胆をどのように経験しているか把握し、学生の援助を振り返り、学生が気付くように指導する ・ 学生が子どもと関係を築いていこうと行動しているときは、タイムリーに助言を行い、子どもと関わる際のアイデアを提示したり、学生のとる行動を確認し肯定的に評価しながら、関係形成がスムーズに築けるよう配慮する ・ 学生が患児とその母親との関係の構築に苦慮している様子が見たれた際、教員は学生の困難の気持ちを理解して、心理的な支えになる ・ 患児・家族・学生の間に入り、関係づくりのきっかけを設定する ・ 学生が子どもや家族と会話できるように橋渡ししたり、モデルを示したり、子どもとの遊びを展開できるような支援をする ・ 学生が子どもの理解やケアに戸惑いを感じていないか細かく確認し、早めの対処をしていくこと
教員・実習指導者が直面する課題	**＜教員ー指導者間での連携不足＞** ・ 実習要綱の閲覧の可否や教員から実習の説明の有無については、「指導者経験なし群」が少なく、10%程度しか受けていない ・ 実習病棟との連携がうまくなされず、すでにスタッフにより検温等が終了してしまい、学生の経験率が低くなる **＜業務と実習指導両方の役割遂行の難しさ＞** ・「学生指導に対する困難感」「いつもどおりにできない負担感」というマイナス面が高得点 ・「学生の能力や態度に対する困惑感」は、「指導者経験なし群」が有意に高得点 ・「業務量」や「医師との関係」において、「指導者経験群」が高得点 **＜学生の特徴を捉えた指導の難しさ＞** ・ 学生のコミュニケーション・関係作り能力の不足 ・ 学生のレディネスが低い ・ 自己中心的な学生の増加 ・ マナーの問題の増加 ・ 従来の指導方法が通用しない ・ 学生を理解することが困難	・ 教員は臨時実習指導者だけでなく実習病棟の他の看護師に対して、複数校の実習を受け入れていることを考慮し、実習での目標や実習に対する学校の考えを積極的に理解してもらえるように働きかける ・ 教員は看護師との実習指導に対する意見交換の機会を意図的に作り、学生指導に関する研修や勉強会を設けるように努める ・ 教員は、臨地実習指導者以外の看護師に積極的に働きかけ、学生に対する理解と対応方法の情報提供に努める

学生の特徴を理解した教員・実習指導者の指導の工夫が必要になってくると考える。

３．小児看護学実習における困難に対する対策について

小児看護学実習における困難に対する対策では、学生が子どもと家族と関係構築ができるよう支援すること、学生の能力に合わせた関わりによって学生自らの気づきを促し、成功体験を増やすこと、そして、教員と実習指導者が密に連携を図り実習を組み立てていくことの必要性が指摘されていた。

以前より小児看護学実習では学生と子どもとの関わりが課題として挙がっていたが、近年ではさらにメディアの普及、コミュニケーションの希薄化などが進行し、その課題はより深刻になっていると考える。小児看護では子どもだけでなく家族を含む看護を展開していく必要があり、コミュニケーション能力を身に付けておくことは必要不可欠である。子どもや家族との関係構築が実習の大切な第一歩と考えると、実習中の教員や実習指導者の支援はもちろんのこと、実習前から人との関わりを増やし、コミュニケーション能力の向上を図ること、人の気持ちを察する能力

を磨いていく必要があると考える。短い実習期間の中で学生が対象者との関係構築という課題をいち早く乗り越えることが、実習での経験や学びを増やすことへつながり、またその経験や学びからの気づきも増えていくのではないかと考える。

教員と実習指導者との連携については、実習目標を達成できるよう大学側からの意向を実習施設へ依頼するという一方的な形ではなく、大学側、実習施設側の双方から意見を出し合い実習内容を考えていく必要がある。そのためには大学側は実習施設でできる範囲・実習施設の特徴を捉えること、その上で大学が掲げている実習目標と内容のすり合わせを行い実習内容の調整を行っていく必要があると考える。

今後、実習をより効果的に進めていくためには、実習形態や実習内容を社会状況の変化に対応させていかなければならない。実習施設の確保という課題は今後も抱えていくことになるだろうが、実習内容を保証するという点については実習目標と実習施設で体験できる内容のすり合わせにより解決していけるのではないかと考える。今後も様々な実習施設で実施された小児看護学実習の内容を踏まえ、小児看護学実習の構成をしていきたいと考える。

文献

1）厚生労働省：平成28年 子どもの医療制度の在り方等に関する検討会 議論の取りまとめ. [インターネット Online], [2018年8月] https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000125581.pdf

2）山本裕子，上山和子：小児看護学実習での学生の学びの特徴-病棟中心と外来中心の実習内容から-. 新見公立大学紀要，（37），121-126，2016.

3）林亮，齊藤麻子，石井くみ子，川口千鶴，他1名：小児看護学実習に対する学生の評価. 順天堂保健看護研究，（6），34-41，2018.

4）布施寿子，笹志寿子，矢島麻美：小児看護学実習における看護技術の経験状況. 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要，（10），20-27，2018.

5）大森裕子，岩瀬貴美子，友田尋子：看護系大学におけるプレパレーションに関する教の現状. 日本小児看護学会誌，（26），132-137，2017.

6）太田智子，川名るり，吉田玲子，江本リナ，他4名：小児看護専門看護師が考える小児看護学実習における学生への支援. 日本小児看護学会誌，（26），38-44，2017.

7）鍬原直美：小児看護学実習における達成感とその要因看護専門学校生と短期大学生の比較より. 大垣女史短期大学紀要，58，99-108，2017.

8）菅原美保：小児看護学実習において学生が患児とその母親の3人で過ごす体験. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌，13（1），21-26，2017.

9）齊藤史恵：小児科外来実習における看護学生の予診による症状アセスメントを通した気づきの特徴. 弘前学院大学看護紀要，12，27-36，2017.

10）大高麻衣子，平元泉，下田小百合，小林育子：小児の輸液時の観察技術習得のための「点滴チェックリスト」を使用した看護師によるダブルチェック場面参加の指導方法の有効性. 日本看護学会論文集:看護教育，（47），119-122，2017.

11）本田里香：小児看護学実習における看護技術経験度-短期受け持ちの実践状況-. JCHO東京新宿メディカルセンター附属看護専門学校紀要，2（1），31-35，2016.

12）吉田玲子，川名るり，太田智子，江本リナ，他4名：小児看護専門看護師が考える小児看護学実習でめざす学生の学び. 日本小児看護学会誌，25（2），53-60，2016.

13）長谷川由香，齋藤啓子：小児看護学実習におけるケア経験向上を目指した学内演習・実習指導の効果. 日本看護学会誌，26（1），89-96，2016.

14）増尾美帆，泊祐子，竹村淳子，岩間恵，他7名：小児看護学実習における看護実践と理論を結びつけるための指導方法の検討. 日本看護学教育学会誌，26（1），79-88，2016.

15）菊池美保子，原田美枝子，前山直美：小児看護学実習におけるSense of Coherence　(SOC)とストレスとの関連-ルーブリックを導入して-. 神奈川歯科大学短期大学部紀要，3，47-52，2016.

16）枝川千鶴子，藤原紀世子，豊田ゆかり：小児看護学実習における看護技術経験の実態. 愛媛県立医療技術大学紀要，12（1），51-57，2015.

17）坪川麻樹子：長期入院中の子どもに付き添う母親の看護学生との関わりに対する認識的変化のプロセス. 新潟看護ケア研究学会誌，1，7-16，2014.

18）藤原千恵子，木村涼子，林みずほ，高島遊子，他4名，臨地実習指導者経験による看護師の小児看護学実習に対する認識と職務ストレスおよび看護キャリア認知の差異. 日本看護学教育学会誌，25（3），25-35，2016.

19）阿部裕美，佐藤佳代子：小児看護学実習において看護学生が小児がんの子どもに関わる際の意識と行動の変化. 川崎医療短期大学紀要(35)，17-23，2015.

20）二宮恵美：小児看護学実習におけるプレパレーションの実施状況. 群馬パース大学紀要，（19），67-72，2015.

21）二宮恵美：看護学生のプレパレーションに対する認識-小児看護学実習前後の調査から-. 群馬パース大学紀要，（19），61-66，2015.

22）山口しおり，上野美穂，山中雅理，濱本洋子，他3名：小児白血病患児へのプレパレーションを学習課題とした実習方法の評価. 保健学研究，27，79-84，2015.

23）甲斐鈴恵，花野典子：小児看護実習でプレパレーションを実施する学生に必要な教育支援　アデノイド・扁桃摘出術の子どもを受け持った学生指導の分析から．日本小児看護学会誌，24（2），65-71，2015.
24）森浩美，小口初枝，岡田洋子：小児看護学実習において看護学生の受け持ち患者になった子どもの思い．日本小児看護学会誌，24（2），51-57，2015.
25）篠澤由香，上杉佑也，樋廻旬子，森川祐子：重症心身障害児病棟における小児看護学実習の一考察　一般小児病棟実習との比較から．日本看護学会論文集:看護教育，（45），106-109，2015.
26）長谷川由香，齋藤啓子，河尻加代子：小児看護学実習における技術経験の実態と課題．関西看護医療大学紀要，7（1），45-51，2015.
27）若瀬淳子，村田美代子，山元恵子：障がい児施設実習における回避因子の高い看護学生の変化　内的ワーキングモデル尺度と質問紙調査からの分析．共創福祉，9（2），55-64，2014.
28）松下聖子，金城やす子：経験型実習を取り入れた小児看護実習における一般病院の小児病棟と障害児施設での学びの特徴．名桜大学紀要，（19），77-84，2014.
29）下山京子，松崎奈々子，塚越八重子，木戸美佐子，他1名：小児看護学実習に対する看護学生の意識．高崎健康福祉大学紀要，（13），257-266，2014.
30）高山充，高橋明美，木村紀子：小児看護学実習で学生が体験した看護技術の、看護技術体験録による分析．川崎市立看護短期大学紀要，19（1），63-68，2014.
31）山下麻実，石舘美弥子，宍戸路佳，久保恭子：入院児のベッド転落を防ぐための基礎教育終了時の看護学生の安全対策．日本看護学会論文集:看護教育，（44），62-65，2014.
32）松野ゆかり，今井七重，長田登美子：小児看護学実習における技術経験　技術経験チェック表からの一考察．日本看護学会論文集:小児看護，（44），182-185，2014.
33）二宮恵美：小児看護学実習においてペア実習を行った学生の思い　プラスの思いとマイナスの思いについて．日本看護学会論文集:小児看護，（44），174-177，2014.
34）中澤京子，小川佳代，江口実希：小児看護学実習における病院実習と施設実習による看護基礎技術経験状況の比較．四国大学紀要，（40），21-27，2013.
35）宮谷恵，大見サキエ，宮城島恭子：教員からみた学士課程における小児看護学実習の現状　実習形態と情報収集を中心に．日本小児看護学会誌，22（2），68-74，2013.
36）渋谷洋子，川上あずさ，池田友美，藤井清美：学生が小児看護学実習で捉えた「小児の最善の利益」．兵庫大学論集，（18），75-79，2013.
37）糸井志津乃，上松恵子：小児看護学実習での発達外来実習の学び．目白大学健康科学研究，（6），37-42，2013.
38）田畑久江，今野美紀，浅利剛史，蝦名 美智子：小児看護実習において看護学生が印象に残った場面を振り返ることによる学習効果　Significant Event Analysisを用いて．札幌保健科学雑誌，（2），95-100，2013.
39）原田美枝子，辻恵美：小児看護学実習において、子どもとの関わりに戸惑う看護学生の学習プロセスの差異と学生指導のありかた．湘南短期大学紀要(24)，73-81，2013.
40）原田美枝子，中谷章子：小児看護学における看護学生の満足度とその要因．湘南短期大学紀要，（24），61-66，2013.
41）二宮恵美：小児看護学実習における看護学生の清潔援助での困難感．日本看護学会論文集:小児看護，（43），161-164，2013.
42）荒木真壽美，吉田美幸：小児看護学実習における学生の不安と学びの特徴．日本看護学会論文集:小児看護，（43），157-160，2013.
43）原朱美，永島美香，勝田仁美，女鹿 瞳：小児看護学実習における重症心身障害児施設での実習の課題．近代姫路大学看護学部紀要，（5），69-74，2013.
44）佐藤朝美，小村三千代，堀田昇吾：ピア・ラーニングを活用した“ペア受持ち制”小児看護学実習における学生の体験．日本小児看護学会誌，（27），73-82，2018.
45）小迫幸恵，空田朋子：学士課程における小児看護学実習での看護技術経験の現状．山口県立大学学術情報，（11），101-110，2018.
46）佐藤寿哲，藤本美穂，西順子，黄波戸航，他1名：小児看護学実習における重症心身障害児施設での学生の学び-コミュニケーションと小児看護学特有の学びに着目して-．大阪青山大学看護学ジャーナル，27-35，2017.